社会学のアイデンティティ
――ブルデューとギデンズの理論的交錯点を通して――

宮　島　　喬

現代社会学への二人の媒介者

やや曖昧な標題であるが、社会学の固有のコンセプトとそれをみちびく基礎視点とは何かを確認したいという観点から、ブルデューとギデンズの理論交錯点についての一試論を、覚書風にまとめた。

「社会学」（sociologie）というディシプリン名称は、周知のようにオーギュスト．コントの『実証哲学』第4巻（1839年）の中に、当時の新造語として登場する。一時はほとんど省みられなかった、芳しからぬこの名称をあえて用いてデュルケムは『社会学的方法の規準』（1895年）を著し、さらに社会学研究史上の一里程標をなす労作『自殺論』（1897）にわざわざ、「社会学研究」（étude de sociologie）という副題を添えた。それから1世紀余、この名称は確かに存続しており、ほとんどだれもその命名者の仕事を知ることなく、またどうかすると、社会学「中興の祖」というべきマルクス、デュルケム、ウェーバーなどの著作も手に取ることなく、古い皮袋に新しい現代風味の酒を盛っている。

その創成期の社会学の正統的、古典的というべき主題または問題構制（プロブレマティーク）を、組み換えつつ現代に媒介する役割を演じてきた存在として、あまたの社会学理論家の名を挙げることができる。そのなかで、筆者はかねて特にピエール・ブルデューとアンソニー・ギデンズに注目してきた。ギデンズは、周知のように、処女作ともいうべき『資本主義と近代社会理論』で、マルクス、ウェーバーのみならずデュルケムの社会理論をも、資本主義的産業化をダイナモとする近代社会の秩序変動の特徴および方向をそれぞれに明らかにしようとする試みとして、叙述した（1971＝1974）。ブルデューの古典社会学理論の媒介の仕方は、これにくらべはるかにたどりにくいが、『再生産』の第Ⅰ部の「象徴的暴力の基礎」のほとんど冒頭に、「権力の基礎」を論じた3人の古典理論家として、マルクス、デュルケム、ウェーバーを取り上げて寸評を加えているパッセージは注目される（1970＝1991：17）。詳しく紹介するスペースはないが、筆者のみるところでは、権力と支配の基礎に階級的力関係をみていたマルクスと、権力の永続的行使にたいする正統性の表象の役割の大きさを正面から押し出したウェーバーに、他にまさっての今日的意義を認めていたように思われる。社会を、下位諸集団の力関係からとらえるという視点、象徴的なものの固有の作用（正統化の意味作用と力の関係の隠蔽という両面がある）への着目という点で、マルクスとウェーバーの影響が、現代へと架橋されているといえるのではなかろうか。

では、現代理論という点で、なぜこの二人に焦点を当てるか。筆者は旧稿（1995）ですでに一部触れてきたつもりである。両者に通底する社会学的な関心は、構造と行為（あるいは客観的なものと主観的なもの）の二元性（duality）を乗り越え、構造よりは「構造化」に重点を置き、これに関わらせて人々の実践あるいは行為に考察を加えるという点にある。この実践は、規則を構成した

り資源を動員する営みとして現われるが、必ずしも意識化されたものではなく、当人にとってつねに言表可能のものでもない。実践は、再帰的ないし自省的な性質をつねにもつが、そこでのモニタリングの作用は、構造によって条件づけられ、習得され、場合によってはなかば身体化されているもの（ハビトゥス）に基礎を置く。そうした実践が社会を構造化し、再構造化していくというプロセスが、この両社会学者によってそれぞれに照明されている。「再生産」というタームがともにキー概念化されている点でも共通性がある。

ブルデュー（1930〜2002）とギデンズ（1938〜　）は、はたして同時代人といってよいだろうか。仏、英という社会背景の違いがあり、激動の1950年代、60年代ヨーロッパを念頭に置くと、8歳という年齢差も小さくないだけに、微妙である。もちろん、その知的・理論的背景や研究対象にも相違はある。しかし、やや後輩である後者が、英国社会学者のなかでも屈指のヨーロッパ社会学通であり、フランス構造主義とも対話してきているという点は重要である。両者が直接言及しあうことは少なかったものの、少なくともギデンズは、ブルデユーの再生産の概念に「社会生活の再帰性」というかれの考え方との収斂をみるとともに、その「ハビトゥス」の概念にも注目している（Giddens，1979＝1989：239）。これに対し、ブルデューのギデンズの著作、理論への言及はほとんど確認できないが、そのことは、比較的二義的なことがらといえよう。

近代と社会分化

社会学が近代という歴史・社会的文脈のなかで誕生した科学であること、とりわけ18世紀から19世紀にかけての「二大革命」（市民革命と産業革命）を経ての、「普遍的な自由と平等という純然たる世俗的観念にみちびかれた運動」がもたらした秩序変動が重要であることを、ギデンズは指摘する（Giddens，1982：4）。では、社会学を、近代社会が誕生させた科学であるという場合、その「近代」の意味として何を重視するか、である。さまざまな見方があるが、その一つとしては、マルクス以前も含めての階級論からデュルケムの社会分業論にいたるまでの、〈社会〉を一体の統合体とみずに、諸下位集団に分化した複数性においてみるという視座の成立を重視したい。上にいう秩序変動は、一個の社会というものを、異なった下位諸集団から構成されていて、それらの間に、有機的調和よりは齟齬や対立があるものとする見方を生み出したのである。

サン＝シモンがその「産業社会」を、これを支え、養う「有用な階級」と、前代からの遺物性を残しながら存続する「有閑階級」とに分け、後には有用な階級の分化に目を向け、下層産業者の境遇に関心を傾けていったことは有名であるが、実は、一時その秘書であり弟子でもあったコントには、ヨーロッパの巨大な変動によって登場してきた「プロレタリア」への注目があった（とはいえ、産業革命の遅れたフランスでは、近代的な工場・鉱山労働者はまだイメージされていない）。『実証的精神論』（1844年）の著者は、階級対立や闘争の契機をみなかったが、この雇用を与えるべき下層階級に同情を示し、彼らを、特にスコラ的教養などに毒されていないため合理的実証性を受け入れうる可能性のある集団ともみていた。マルクスは特別な意味で社会学的思考の系列に入ってくるが、なんといってもその意義は、19世紀西欧社会（典型はイギリス社会）を、階級の両極分解を通して階級対立があらわになる社会として捉えた点にあろう。その階級の分解と再編の動的な構造化の追究はとりわけ、『資本論』第1巻のイギリスにおける小生産者のドラスティックな分解＝没落の過程の分析に示されていて、その分析は範例たりうる価値をもっている。

しかし20世紀の社会構造論は、同じく下位諸集団への着目といっても、二つの方向に分化したといえるのではないか。

一つは、古典的な資本制社会の対立シェーマに

こそよらないが、社会の不平等構造の解明のために一貫して「クラス」の関係を分析の軸にすえるもので、ブルデューはこの流れを代表する。この点で、上述のようにマルクスへの肯定的な論及も少なくなく、社会的諸関係が階級関係という力関係でもあるという「客観的真理」をあきらかにしたのはマルクスにほかならない、と揚言している（Bourdieu & Passeron，1970＝1991：17）。ただし、ブルデューらの諸調査で用いられる「クラス」の分類の仕方は、「生産関係」からは離れる傾向を示し、フランスの公式統計でもちいられるCSP（社会職業的カテゴリー）にも折り合いをつけるなど、現代化されている。だが、それでも、ブルデューにおける主にマルクスのそれと思われる階級論の影響の強さは、著作の随所に顔をのぞかせている。なかでも、『ディスタンクシオン』の中で、上層階層の文化趣味に現れる芸術至上主義などの無償性によって特徴づけられる態度を「必要性への距離」（distance à la necessité）によって説明するさい、著者は、「物質的条件にたいする美的性向の依存性」（1979＝1990：83）こそが、これを解き明かすカギだとしているが、この点などマルクスとの親近性は明らかである。ただ、同時にブルデューは、階級成員の意識を、あらゆる生活領域にかかわるハビトゥスのレベルにまで探ろうとしているから、その点でマルクスを離れて行為論へと接近しているといえる。

いま一つの流れは、マックス・ウェーバーの影響なども取り込みつつ、階級を、存在（在るもの）としてよりは、むしろ過程として捉える方向へと進む。それは、主としてギデンズの観点である。「先進社会の」と限定を付したその階級論への接近がすでに示唆的であるが、かれは「階級構造化」（class structuration）というタームによりながら、構造化のタイプやレベルを追究すべきだとする（Giddens，1973＝1977：9）。この観点に立てば、「アメリカ社会に階級は存在するか」とか「アメリカは階級社会か」といった問いは、不適切なのであり、階級的なものは絶えず生成され、個人における、または世代間での社会移動などを通じて再編もされる。この社会移動のチャンスの広い配分、または逆にその封鎖性が、階級構造化の度合いを左右するのであり、そうした構造化においてアメリカ社会がたとえばイギリス社会ほど高くはない、といった議論がなされうるのである。

構造、構造化、行為

こうした視点は、行為論へとすでに一歩近づいている。ちなみに藤田英典は、ブルデューとギデンズの階級・階層へのアプローチは共に、行為者にとっての「社会空間の歪み」を問題にしているという意味で、「行為論的捉え方」をなしていると性格づけている（藤田、2005：78）。

ところで、構造化という視点は、のちにギデンズが定式化したように、「構造の二重性」につねに留意するものであり、構造は、行為の産出を媒介するものであると同時に、諸行為のつくりだす結果でもあるという二重性において捉えられるべきだとする（1977＝1986：64）。

社会生活は基本的に「再帰的」（recursive）な性格をおびており、言い換えると、社会的場面でなされる行為とその結果とはたえず相互に影響を与え合う関連のなかにあるから、構造と行為はまさしく相互依存的である（この場合の行為には、「エイジェンシー」が充てられる）。ただ、ギデンズが「構造」の特性はたんなる心的相互関係のようなものではなく、「規則と資源、あるいは社会システムの特性として組織された変換のセット」とみている点は付言されなければならない（1984：25）。

たとえば人々は愛し合い、結婚し、子どもを生むといった行為を通して、家族生活を構成していくが、家族生活を構造としてみるならば、それは法的規則、サンクション、経済的条件など（規則と資源）によって可能とされており、それらは人と人の心的相互行為に還元できない。そしてこの構造が、こんどは家族メンバーたちの安定した持

続的な相互行為が行われうる条件ともなるのであり、規則と資源はそれに役立つ。

ブルデューについては、ある時期までマルクス主義や構造主義との近さが印象づけられていたが、「ハビトゥス」を「持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステム」として重用するようになり、かつ、これを、「構造化する構造」、「構造化された構造」として捉えるようになるとき（1980＝2001：83）、ギデンズとは非常に近い位置に立つことになる。D. シュワルツは、ハビトゥス概念を通して「行為を文化、構造、権力と結びつける実践の理論」を提起したブルデューは、「行為・構造イッシュー」を社会学の中心問題として置いた大戦後世代社会学者のトップランナーに位すると述べている（Swartz, 1997：8）。この言葉はおそらく、「ギデンズと共に」と言われるべきだっただろう。

階級というテーマからは少し離れるが、ブルデューは、家族生活や婚姻に関する多少とも構造化された規則性の存在に目を向け、これを構造－行為の相互媒介によって説明しようとする。その社会に生きる成員たちは、所与の環境・条件から幾つかの原則を習得し、それを自らの行動性向の中に埋め込み、ハビトゥス化し、個々の状況に応じて諸行為を案出しながら、構造化された規則を再生産していく（この場合の「再生産」とは変換、置き換えなどの過程をふくむ）。これが、かの有名なフランス、ベアルン地方の農民社会を扱ったかれの婚姻戦略論（Bourdieu, 1972a）であり、また、行為者のなかに取り込まれている「名誉の維持にかかわる規則」と関連づけて相互行為と戦略をたどった北アフリカ、カビール地方の農民の実践論である（1972b）。

いっぽう、ギデンズは、ハビトゥスにあたるような概念は設定していないかにみえる。しかし、その著作の中では、「言説的意識」（discursive consciousness）に対比しつつ、「実践的意識」（practical consciousness）という表現の下に、行為を実行するさいたくみに用いられる、行為者が言葉によっては定式化できないような「暗黙知」の機能に注目している（1979＝1989：6, 61～62）。この点でも両者の距離はきわめて近い。

ここで、関連で、アーヴィン・ゴフマンに触れなければならない。ギデンズのいう「実践的意識」、ブルデューの「ハビトゥス」の作用に通じるものを、事実上、日常的行為、相互行為の具体的展開のなかにもっとも豊富に読みとっていたのが、ゴフマンであったといえるだろう（たとえばGoffman, 1967）。ギデンズは、デュルケムの自殺行為の説明に自省的な相互行為としてこれを理解するという視点がないことに不満を表明し、ひるがえってゴフマンに賛辞を送っている。と同時に、そのゴフマンに対し、制度の説明、歴史と構造変換の説明がほとんど欠けているために、「行為と構造の二元論」に陥っており、行為を構造の特性へと結び付けていく弁証法の可能性も絶たれている、と批判する（1979＝1989：87）。ブルデューもまた、ゴフマンには多大の関心を寄せ、身近な世界に引き付けて鋭く行為のロジックを追っている彼ら「相互行為論者」に「連帯感を覚える」とまで述べているが、同時に、社会的実践の詳細な観察・分析から出ることをしないその視座には、「理論的近視眼」だとして、違和感を表明する（1992：88）。アンビヴァレントなゴフマン観という点で、奇しくもヨーロッパ系社会学者の共通性が示された。いずれにせよ、この二人の「構造－実践」の社会学にとって、相容れない点を確認しつつももっとも近いと感じるアメリカ社会学者がゴフマンだったということである。

実践の理論としての行為論の展開

田辺浩はしばらく前に、慣習行動的な実践によって社会が生み出され、さらに再生産されるというプロセスへの社会学的な着目、これをもって「行為理論の革新」と呼んでいる（1995：15）。

学史的にみると、社会学的行為理論は、実証主義的な決定論やアメリカ種のS－R図式による行

動主義などを批判的に乗り越え、ウェーバー＝パーソンズの主意主義的な理論へと展開されてきて、そこでは行為は単なる所与の条件の決定の産物ではなく、能動的な意志や選択をも含むものとしてつかまれ、理想主義的要素が前面に押し出された。これに対し、行為を、「アクション」や「アクト」という意志性や一回性を思わせるような概念から切り離し、再生産的な文脈で捉えなおすという動きが登場する。

ブルデューは慣習行動または実践（pratique）という言葉を用い、ギデンズはしばしば「エイジェンシー」（agency）の言葉を行為に充てた。その意味するところについて、かつて筆者は、次のように論じた。人々の実践はすべて、所与の条件のなかで組み立てられていくもので、本質的に条件づけられ、文脈づけられているのであり、この所与条件を「構造」と呼ぶならば、実践は構造と切り離せず、構造の条件づけをつねに引きずっている（宮島、1995：7～9）。このような行為は、一回一回動機づけられ、選択され、その都度組織されるのではなく、むしろ反復性、（一見したところ）自動的とさえみえる無意識のうちに現れることもあるが、しかし再帰的な（reflexive）性格もたないわけではない。

＊“reflexive”の訳語として「再帰的」をとるか、「自省的」あるいは「反省的」をとるかは、議論のあるところで、厳密にいえば観点の違いを示しているが、ここでは立ち入らない。翻訳者の訳語の選択も分かれているため、本稿では両者を併用する。翻訳のない文献に言及しつつこの語を用いる時には、主に「自省的」の語を充てている。

行為の再帰的性格について、ギデンズは興味深い例として、今日欧米のどの社会でも、結婚生活を始めようとする人は、離婚率が高いということを承知しているという事実をあげている（1990＝1993：60）。人々は単にこの客観的なデモグラフィックな条件のなかで行為しているのではなく、その条件についての当人の認識が、明晰に意識されてではないにせよ、行為の組織の仕方のなかに入り込んでいて作用するということである。この再帰的過程が、人によって、配偶者探しを慎重にさせ晩婚化させる、結婚という共同生活に入るにせよ法的結婚を避けるかまたは遅らせる、あるいは配偶者との財産の一体化を避け、分離登録をする、といった行為をとらしめる（なお、そうした結果は、最初から意図された目標といったものではない）。

ここに、構造によって条件づけられながら、受動的でも機械的でもない、状況に応じた対応を案出していく実践のロジックをみることができる。ギデンズは、これを「自省的な行為のモニタリング」（reflexive monitoring of action）と呼び（1984：5）、ブルデューはほぼ同じことを、「戦略」と呼んでいるとみてよいだろう。そして後者も、その後期の著作では、「自省性」（réflexivité）というタームを用いるようになる。L. ワッキャンは、ブルデューにおける自省性は、実証主義的な社会科学観およびそれによる事実と価値の完全な切り離しに異を唱えている点で、ギデンズと考えを共有しているとみている（Wacquant, 1992：39）。

ブルデューにおける「自省性」の特徴として、およそ社会学的探求は、それを可能にする知的条件だけでなく、それを可能にする、あるいは阻む社会的条件にも同時に反省をむけなければならないとしていて、主に社会学の方法、認識における自省論として展開されているようにみえる。かれの『社会学の社会学』（1980年、原題はこれと異なる）は、まさにこの視点に立った議論である。しかし、見方によっては、かれのハビトゥス論は、それ自体に自省的な要素を内在させているともいえる。ブルデューの社会学的分析のなかにおける行為者たち、たとえば美的対象を前にしそれについて語る上層階層の人々にしろ、カビールの集落内で相互行為を繰り広げる農民にしろ、その行為

にはつねに自省的な要素がみてとられている。

ブルデューの行為論または実践の理論はまさにハビトゥスによる戦略論なのである。じっさい、ハビトウスにおけるリフレクシヴな要素は、時期とともに次第に強調されていくようになり、1990年代のブルデューは、次のようにまで述べるようになっている。「ハビトゥスによって暗示される方向づけは、コストとベネフィットの戦略的な計算までも伴っていることがあり、ハビトゥスがその固有の論理に従って達成する諸々の作業を意識的なレベルにまでこれをもたらすことがあります。それだけではありません。主観的構造と客観的構造の日常の型とおりの一致が突如破られるような危機の時期には、少なくとも合理的たりうる手段をもった行為者の間では、合理的選択が打ち勝つような一連の状況がかたちづくられるのです」(Bourdieu, 1992：107)。

戦略的行為の合理性、非合理性

こうした行為者像をみるとき、現代社会学では、高度に意識的ではないにせよ、与えられた条件、状況をモニタリングし、微妙な行為の調整をしながら、たくまずして適応していく、どちらかといえば合理的な行為者像が強調されているようにみえる。特にギデンズについてそのような印象が強い。ハビトゥス、あるいは「実践的意識」(ギデンス)の合理性、それが一つの主題となっているかの観がある。しかし、いうまでもなく、ハビトゥスや実践的意識のつむぎだす「合理的」な戦略行為が、より広いレンジの中での判断基準に照らすと、合理性を担保しないこともありうる。

ブルデューは、そのことにも目配りをしている。たとえば、ハビトゥスの概念をまだ用いていない『遺産相続者たち』の中に、高等教育就学率の大きな階級間格差に関連して、の次のような一文がある。

「客観的な教育機会におけるこうした大きな格差は、当事者たちは意識的に評価するわけではないとしても、日常的なもののとらえ方の領域ではじつに多様な仕方で表現され、社会集団に応じて高等教育のイメージを、『ありえない』将来、『ありうる』将来、『当然の』将来といったように決定していく」(Bourdieu et Passeron, 1964＝1997：12～14)。

つまり、高等教育に進むか否かという選択を前にしたある階層に属する生徒や親などの「当事者」が、日常的な知覚界の中でどうモニタリングを行い、自分にとっての進学という可能性を判断していくかというと、それは決して合理的とはいえないということである。たとえば、労働者ミリューに生きる生徒は、自分の身近のきょうだい、親戚、近隣者に大学生活を送った者などだれ一人いず、したがって「大学なんて、思いも及ばぬ縁遠い世界だ」と判断し、はじめから進学という選択肢を排除してしまうかもしれない。逆に、親もきょうだいも近い友人もみな大学に行くというミリューの中で育つ上層の生徒は、自分の能力や意欲に慎重に照らすことをせず、「大学に進むのは当然」と決めてかかるだろう。その結果、能力的に優れている生徒たちが進学を放棄してしまうという、「恵まれない階級」生徒の過剰排除が生じやすい。

進学という行為における再帰的な性質、すなわち能力や意欲を必ずしも反映しない、循環的な性質が見てとれるわけで、これが少なくとも一部、民衆階層の過剰な「自己排除」(autoélimination)という加重された不平等を結果する。そのことは、「高等教育に進学できる主観的期待度は、最も恵まれていない階級の人間にとっては客観的可能性よりもさらに低くなる傾向がある」(Ibid., 14)という言葉で表現されている。

広い意味で文化的再生産論の観点に立っている『ハマータウンの野郎ども』の著者P. ウィリスが、ブルーカラー労働者の子弟たちの言説の中に見ているのは、ある意味では理にかなった彼らの自己省察である。マニュアル・レイバーこそが男らしい自立した職であると誇り、それゆえ教育達

成などに神経を使わず、教師の顔色をうかがうことなどせず、自由に冒険的に青春を送ろうとする（Willis, 1977＝1985）。ギデンズ式にいえば、自分の知っている規則や資源を用い、自分が何をしているかを承知しながら行為を生産、再生産していることになる。しかし、その産出行為は、別の観点からみれば、報酬も社会的評価もめぐまれない、可能性としてはいつ何時他の人間に置き換えられてしまいかねない地位の生産をめざすものであるから、合理的とも賢明ともいえないかもしれない。彼らの行なう自省的なモニタリングが、どのような観点からみて合理的なのか、また合理的でないのか、それを問う別の視点も用意されるべきだろう。

現代の変動の文脈と再帰的近代化

現代社会の行方をややマクロな考察に再帰的な生産・再生産の行為の観念を適用しようとしたのはギデンズだろう。いっぽう、1990年代にはブルデューのほうは現実の政治批判やメディア批判にエネルギーを注ぎ、その固有のハビトゥス、実践の視点による社会的行為者への接近は、たとえば『世界の悲惨』のような、社会の被剥奪周辺層の個々人のリフレクシヴな実践のありようを捉えることへと向けられている（Bourdieu, 1993）。このかれの企てには、筆者は別の機会にやや触れたので（宮島、2001）、ここでは立ち入らない。

構造化は当然、再構造化（構造の解体、つくりかえ）のプロセスを含む。再帰的であるということは、構造化、再構造化が、自然現象のように機械的に、あるいは鎖状に因果的にではなく、過程自体になかば埋め込まれた人々の思考、討議、実践などの入り組んだ反照関係を伴いながら進められることを意味する。それは本来的な人間の活動といってよいが、そのリズムが一般に早まり、しかもかつて以上に科学や練られた討議にもとづく作為によって進められるのが、近代の特徴であるとされる。

もちろん、理念や意志を明示化した人々の運動（たとえば反核、反原発、雇用の男女平等、などを掲げる社会運動）も、この再帰的な過程を構成するが、それらは必ずしも意志的・理念明示的でないようなさまざまな個人的・集合的行為と相互作用しながら、また種々の資源が動員されながら、この過程をつくりあげる。

ギデンズは特に、「再帰的モダニティ」というという言葉を強調する。「社会の実際の営みは、その営みのなかに絶えず供給されていく新たな発見によって日々手直しされていく。しかし慣習の修正が、物質的世界への技術的介入を含め、原則として人間生活のすべての側面に徹底して及んでいくようになるのは、近代という時代がはじめてである」（1990＝1993：56）。おそらく相対的にはそういえるだろう。こうして貧困、疫病、疾病、環境汚染・破壊などの除去や、教育の普及のような問題が日々かつてなく意識的に取り組まれ、それなりの成果を挙げてきたことは否定できない。

しかし、こうした議論に過度のオプティミズムを見出すこともたやすい。モダニティは一枚岩の等質空間ではなく、格差、資源の不平等配分を含んだ非対称の空間もある。だからたとえば不衛生や疫病をなくすための発展途上国の――先進諸国の援助も受けた――再帰的な活動が、こんどは「人口爆発」を引き起こしてしまい、容易には解決しがたい一連の別の問題を引き起こすといった事態を招来している。

先進諸国でも、社会の営みの「手直し」が、ブルデューの批判したような「自由交換主義」の下で進められるか、それとも、「公正」、「公共性」という価値を追求するかという対立は鋭い。また、グロバリゼーションへの一種の再帰的な反応が、それと正反対とみえるローカルな文化アイデンティティや、特殊な宗教意識の復興（厳密にいえば決して過去の文化の再現ではない）を惹起したりし、争点を生み出している。このグローバリゼーションへの再帰的な反応として、ギデンズ自身は、自国内の近年のスコットランドの分離志向の運動

の展開に強烈な印象を受けているようである（1999＝2001：33〜34）。

それぞれに行為者があり、運動があり、その実践は、再帰的な性格を内に織り込みながら展開されている。しかし、当然、それぞれの実践の固有の論理や条件の立ち入った分析も必要であり、それ自体における、また諸実践間の矛盾や対立も過小評価されるべきではない。社会学の課題は、起こりうる事態についての予定調和的な観望にあってはならないはずである。

Bourdieu, P et J.-C. Passeron, 1964, *Les héritiers*, Minuit,（石井洋二郎訳）『遺産相続者たち』藤原書店， 1997 年.

Bourdieu, P et J.-C. Passeron, 1970, *La Reproduction*,（宮島喬訳）『再生産』藤原書店，1991 年.

Bourdieu, P., 1972a, Les stratégies matrimoniales dans le système de reproduction, dans *Annales. Economie-Société-Civilisation*, 27.

Bourdieu, P., 1972b, Trois études d'ethnologie kabyle, dans *Esquisse d'une thérie de la pratique,* Seuil.

Bourdieu, P., 1979, *La distinction : critique sociale du jugement*, Minuit,（石井洋ニ郎訳）『ディスタンクシオン』Ⅰ，藤原書店，1990 年.

Bourdieu, P., 1980, *Le sens pratique*, Minuit,（今村仁司・港道隆訳）『実践感覚』上，みすず書房，1988 年.

Bourdieu, P., 1992,（avec L. Wacquant），*Réponses*, Seuil.

Bourdieu, P, 1993, La rue des Jonquilles, dans Bourdieu（sous la direction de），*La misère du monde,* Seuil.

藤田英典，2005,「階級・階層」宮島喬編『現代社会学・改定版』有斐閣.

Giddens, A., 1971, *Capitalism and Modern Social Theory,*（犬塚先訳）『資本主義と近代社会理論』研究社，1974 年.

Giddens, A., 1973, *The Class Structure of the Advanced Societies*, Hutchinson,（市川統洋訳）『先進社会の階級構造』みすず書房，1977 年.

Giddens, A,, 1977, *Studies in Social and Political Theory,*（宮島喬他訳）『社会理論の現代像』みすず書房.

Giddens, A., 1982, *Sociology : A Brief but Critical Introduction*, Macmillan Press.

Giddens, A., 1979, *Central Problems in Social Theory*, University of California Press（友枝敏雄他訳）『社会理論の最前線』ハーベスト社.

Giddens, A., 1984, *The Constitution of Society*, Polity Press.

Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press,（松尾精文・小幡正敏訳）『近代とはいかなる時代か？』而立書房，1993.

Giddens, A, 1999, *Runaway World*, Profile Books,（佐和隆光訳）『暴走する社会－グロバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイアモンド社，2001 年.

Goffman, E., 1967, *Interaction Ritual*, Pantheon Books.

宮島喬，1994,『文化的再生産の社会学――ブルデュー理論からの展開』藤原書店.

宮島喬，1995,「文化と実践の社会学へ」同編『文化の社会学』有信堂.

宮島喬，2001,「ブルデュー理論と社会周辺層への視点」『現代思想』2 月号.

Swartz, D, 1997, *Culture and Power : Sociology of Pierre Bourdieu,* The university of Chicago Press.

田辺浩，1995,「行為理論の革新――構造化,行為,反省性」宮島喬編『文化の社会学』有信堂.

Wacquant, L., 1992, Introduction, dans P. Bourdieu, *Réponses*, Op. cit.

Willis, P., 1977, *Learning to Labour*, Gower（熊沢誠・山田潤訳）『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房，1985 年.

〈追記〉　本稿の校了の直前に、上記の文献中の Bourdieu, 1992 の邦訳書が、訳者水島和則氏によって『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待――ブルデュー、社会学を語る』藤原書店として公刊された。本稿の中での同書からの引用には、残念ながら同訳書を利用できなかった。